徳永二男と仲間たち
室内楽の夕べ

弦楽四重奏曲　第67番　ニ長調　《ひばり》 ……ハイドン

ピアノ四重奏曲　第1番　ト短調　K.478 ……モーツァルト

ピアノ五重奏曲　ヘ短調　Op.34 ……ブラームス

冬

2002 四季のコンサート

2002年12月6日(金) 6:45PM
会場：浜松市教育文化会館
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

徳永二男（ヴァイオリン）

ヴァイオリニストの父茂および鷲見三郎氏に師事。桐朋学園大学入学、齋藤秀雄氏に師事。史上最年少のコンサートマスターとして東京交響楽団に入団後、1968年ベルリンへ留学。1976年NHK交響楽団のコンサートマスターに就任。その後長年N響の顔として抜群の知名度と人気を誇る。1994年退団後国際的なソリストとして世界各地で演奏する一方、1995年から東京のJTアートホールの音楽監督を務め、1996年からは宮崎国際室内楽音楽祭の総合プロデューサーを務めるなど、日本の室内楽の分野における中心的立場を確固たるものとしている。

小林美恵（ヴァイオリン）

東京芸術大学卒業。安宅賞を受賞する。1983年第52回日本音楽コンクール第2位入賞。1988年第4回シュポア国際ヴァイオリンコンクール第2位、併せてソナタ賞を受賞。1990年ロン＝ティボー国際コンクールヴァイオリン部門で日本人として初めて優勝し、本格的な演奏活動を開始する。プラハ放送交響楽団やハンガリー国立交響楽団など著名なオーケストラや演奏家と共演し、好評を博す。またCD録音にも積極的に取り組んでいる。

篠崎友美（ヴィオラ）

1995年桐朋学園大学を卒業。1992年東京国際音楽コンクール室内楽部門において「齋藤秀雄賞」受賞。1997年ミュンヘン国際音楽コンクール第3位入賞。現在は室内楽やソロを中心に活動し、紀尾井シンフォニエッタ東京、ストリングアンサンブルヴェガ、ジャパンチェンバーオーケストラ、サイトウキネンオーケストラ等のメンバーとして活躍中。2002年より新日本フィルハーモニー交響楽団の首席ヴィオラ奏者を務めている。

古川展生（チェロ）

9歳よりチェロを始める。1996年桐朋学園大学卒業。1992年東京国際音楽コンクールにて「齋藤秀雄賞」受賞。1995年第64回日本音楽コンクール第2位入賞。1996年よりハンガリーのリスト音楽院に留学。チャバ・オンツァイ教授に師事。1997年ドイツ・マルクノイキルヘン国際コンクールにてディプロマ賞受賞。1998年より東京都交響楽団首席チェロ奏者に就任。さまざまな室内楽プロジェクトにも積極的に参加している。

伊藤恵（ピアノ）

桐朋学園高校を卒業後、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学、ハノーファー音楽大学においてハンス・ライグラフ氏に師事。1979年エビナール国際コンクール第1位、1981年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第3位及び特別賞など数々のコンクールに入賞後、1983年第32回ミュンヘン国際音楽コンクールピアノ部門で日本人初の優勝を飾る。リサイタルや室内楽で活躍する一方、日本やヨーロッパの主要オーケストラと協演を重ねている。

徳永二男と仲間たち
室内楽の夕べ

TSUGIO TOKUNAGA AND
HIS FRIENDS CONCERT

曲目解説　　真嶋　雄大

●ハイドン／弦楽四重奏曲　第67番　ニ長調《ひばり》Hob. Ⅲ-67

1790年2月、ハイドン（1732～1809）がそれまで楽長として永年務めてきたエステルハージ家の侯爵夫人が没し、マリア・アンナ・イェルリシェックという女性が家事を監督するために侯爵家にやって来た。ところがその年の9月28日、ニコラウス・エステルハージ候も没してしまう。そのためマリアはウィーンに戻り、実業家のヨハン・トストと結婚することになった。この結婚を祝して書き上げられたとされている《第2トスト四重奏曲（全6曲）》の中の一曲が《ひばり》である。

第1楽章はアレグロ・モデラート、ニ長調、2/2拍子、ソナタ形式。導入部に続いて、ひばりをイメージする印象的な旋律が第1ヴァイオリンによって演奏される。和声的性格の強い第2主題が現れた後に展開部が始まるが、第1主題と第2主題が転調を繰り返しながら展開を含む再現部と、通常の再現部が2回登場するという特異な構成になっている。

第2楽章はアダージョ・カンタービレ、イ長調、3/4拍子、3部形式。主題に基づきながら、中間部はイ短調となって再現部での変奏に続いていく。

第3楽章メヌエットは、アレグレット、ニ長調、3/4拍子。第1部、第2部とも変化に富んだ緻密な構成である。続くトリオは短調で始まり、悠々とした趣がある。

第4楽章フィナーレはヴィヴァーチェ、ニ長調、2/4拍子、3部形式。第1主題は2部形式ながら基本的構造はABAとなっており、律動的な音型は終始この楽章を支配する。二短調に変わって第2主題へと受け継がれた後、第1主題を再現しコーダに入る。

●モーツァルト／ピアノ四重奏曲　第1番　ト短調　K.478

およそ鍵盤楽器において当代きっての演奏家でもあったモーツァルト（1756～1791）は、ピアノ作品についても独自の境地を余すところなく示した。個性的なピアノ協奏曲の「ニ短調K.466」と「ハ長調K.467」等が作曲された1785年、当時はまだなかったピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロによるピアノ四重奏曲という形式に初めて着手している。どんな契機によるものかは明らかではないが、いずれ協奏曲的な華やかさと、弦楽四重奏曲的な密度の高い室内楽が根底にあることに疑いはない。モーツァルトはもう一曲、ピアノ四重奏曲（第2番K.493）を残している。

第1楽章は、アレグロ、ト短調、4/4拍子、ソナタ形式。冒頭、音楽学者アインシュタインが「運命のモティーフ」と呼んだ激しい楽句から開始され、その独特な緊張感は楽章全体にみなぎっている。ピアノと弦によってこのモティーフが繰り返される主題部分の後、穏やかな雰囲気に一旦は変わるが、すぐに第1主題から派生した音型にとって変わられ、そして第1主題が再び現れる。それが交互して徐々に盛り上がりながら楽章を閉じる。

第2楽章はアンダンテ、変ロ長調、3/8拍子、展開部のないソナタ形式。ピアノで始められる主題を初め、属調での旋律は穏やかで美しく、伸びやかである。

第3楽章ロンドはアレグロ・モデラート、ト長調、2/2拍子、ソナタ風ロンド形式。第1主題をピアノと弦が協奏曲風に掛け合いながら展開すると、一転してホ短調で主題が繰り広げられる。再びト長調に戻るが、主調であるト短調が顔を覗かせることなく曲を終わる。

●ブラームス／ピアノ五重奏曲　ヘ短調　Op.34

1862年6月、ケルンのライン音楽祭に出向いたブラームス（1833～1897）は、クララ・シューマンの家の近くに2週間滞在した。その折この曲は2台のチェロを持った弦楽五重奏として作曲されたが、ブラームスを満足させる効果には程遠く、以降2台ピアノの形に改作するなど試行錯誤が繰り返され、ようやくピアノ五重奏曲として64年10月に完成するのである。ブラームス独自の語法がはっきりと表面に出るようになった作品で、重厚でありながら緻密な側面を有し、柔らかさと情熱が同居するブラームス創作第2期の頂点とも位置付けられる作品である。

第1楽章はアレグロ・ノン・トロッポ、ヘ短調、4/4拍子、ソナタ形式。暗く特徴的なユニゾンでの第1主題から開始され、切れ味鋭くピアノと弦がスリリングに掛け合いながら経過部、展開部、再現部と続き、ドラマティックな盛り上がりを見せて激しい終結を迎える。

第2楽章はアンダンテ・ウン・ポコ・アダージョ、変イ長調、3/4拍子、3部形式。シューベルトを彷彿とさせる穏やかな表情と、しっとりとした抒情性が溢れる魅惑的な断片。

第3楽章スケルツォは、アレグロ、ハ短調、6/8拍子、3部形式。ベートーヴェンの第5交響曲の第3楽章を思わせるが、ブラームスの作品の中でも特に変化に富んだ躍動的なスケルツォである。

第4楽章は、ポコ・ソステヌートーアレグロ・ノン・トロッポ、ヘ短調、序奏を持つロンド形式。仄暗く神秘的な序奏から、チェロでの第1主題、哀愁を帯びたヴァイオリンでの第2主題と引き継がれ、各主題が転調しながら勢いを増して結末へと突き進む。